

MESSAGE 「探究2.0」宣言：対話から始まる『ミニ探究』



探究を開く

「多様性」は現代社会を象徴するキーワードの一つとなりました。確かに、社会全体としては、多様性への寛容さは高まっているように見えます。しかしその一方で、「私たち」と「私たち以外」という線引きだけが強まり、意見や価値観の異なる他者と腹を割って深く対話する機会がむしろ減っているのではないかと—そのようにも感じられます。

こうした日本社会の状況を踏まえ、高校探究プロジェクトは、高校における探究をより対話志向で、他者に開かれたものへと転換する必要があると考えています。

このことは、もちろん、現在広く行われている個人やチームによる「探究」を否定するものではありません。しかし、探究がともするとI型の深掘りに偏り、また“システムへの眼差し”を欠いた解決策—背後にある構造・仕組み・制度・文化・相互作用といったシステム全体を見ずに行われる対症療法的なアプローチに陥りがちな側面もあるように思います。高校生が行う探究では、もっと多様な“他者”の眼差しを取り込みながら進めていくことが大切ではないでしょうか。そうすることでこそ、多面的・多角的に考えたり、さまざまな他者をケアしながら合意形成をしたり、「納得解」を創出したりすることができるようになっていくと考えています。

高校探究プロジェクトでは、こうした対話志向で他者に開かれた探究を「探究2.0」と位置づけ、その実践コミュニティを全国の高校生や先生方とともに広げていきたいと考えています。

「ミニ探究」で基盤づくり

「ミニ探究」は、この「探究2.0」の基盤づくりとなる学習です。それは、パッケージ型の教材で、探究の流れをなぞるようなものではなく、また、「予定調和」の探究でもありません。具体的には、右の二つのフェーズで進めます。

この「ミニ探究」では、「大きな問い」の設定、それへのアプローチの考案をいずれかの教科の見方・考え方に落としこんで行う活動と、それぞれの教科での検討結果を交流する活動が柱になっています。

「ミニ探究」

フェーズⅠ

- | | |
|---|--|
| ① | あるテーマやトピック（例えば、「水」「茶」など）に対して、自分の好きな教科の視点から「問い」を見いだす。 |
| ② | 小グループで、①で見いだした「問い」と、その「問い」に込めた想いや背景について対話する。 |
| ③ | ②の対話をもとに、クラス等で数時間かけて取り組む「大きな問い」をつくる。 |

フェーズⅡ

- | | |
|---|--|
| ④ | ③の「大きな問い」に対して、 <u>教科ごとのチームに分かれ、以下のことを検討する。</u>
・この教科の視点や方法で、どのようなアプローチが可能か。
・そのアプローチによって、どのような結果が得られそうか（複数）。（調査や試行をする場合もある。） |
| ⑤ | 複数教科に及ぶグループで、④の検討結果を持ち寄り、「大きな問い」に対する「答え」や「行動」を練り上げ、「探究シナリオ」としてまとめる。 |
| ⑥ | 他のグループと「探究シナリオ」を批判的に検討し合い、リスクと可能性を顕在化する。 |
| ⑦ | 「大きな問い」の探究プロセスを振り返る。 |

フェーズ1から生徒に取り組ませるほうが自分事化しやすいですが、場合によってはフェーズ1は教員が行い、フェーズ2、すなわち「大きな問い」を提示することから始めることも考えられます。いずれにしても、最大の特徴は、**生徒と教員がともに取り組むこと**です。教員のみで一つのチームを編成しても、生徒に混ざって取り組んでもよいでしょう。こうした経験の積み重ねこそが、総探や教科横断に対する目線が合い、学校に探究文化の種をまくこととなります。

さらに、後に行う個人やチームでの探究過程でも、「ミニ探究」の経験を活かす対話の場を設定することで、探究文化を芽吹かせることができます。例えば、探究の初期や中期でのポスターセッションが考えられます。無自覚であった背後にある価値観や他のアプローチの可能性に気づかされたり、リスク等を問うたりする場となるはずですが。

昨年度（2024年度）、全国の先生方とともに「ミニ探究」教材開発ワークショップ（全3回）を開催しました。5つのテーマでチームを結成し、教科横断の視点で協働し、授業デザインに取り組みました。プロセスそのものが“探究”になる学びを実感する場となりました。ワークショップの様子や参加者の声など、ニュースレター（[Vol.37](#), [Vol.41](#), [Vol.43](#)）をご覧ください。

